

アウグストゥス時代における「イタリア人」

——イタリア半島の民族像と「イタリア人」の創造——

梅崎 貴宏

1. はじめに

古代のイタリア半島には、ラテン人を含め、エトルリア人、サムニウム人等の言語、文化、習慣が異なる多様な民族がいた。ローマは、イタリア半島の諸都市・民族と相次ぐ戦争を経て、前三世紀までに半島北部を除く地域を支配下に加えていった。イタリア半島の都市・民族は、ローマの支配下に入った後も多くの点で自治を認められていた。約一世紀の間このような関係が続いたが、前一世紀にそれらの一部がローマに反乱を起こした。この同盟市戦争 *bellum Italicum*, *bellum Sociale* と呼ばれる戦争の最中にローマ側から市民権付与に関する法律が成立し、反乱は徐々に収束していった。市民権付与の諸法により、イタリア半島の全都市がローマの政治体制へと組み込まれていった。

イタリア半島の様々な民族は、同盟市戦争を経て政治的にも同質化し、またラテン語が普及することにより言語的にも一体になって

いった。このような過程はイタリア半島のローマ化 *Romanization* として、そしてイタリア半島が政治的・文化的に均一になっていくことは「イタリアの統合 *Italian Unification*」として解釈されている。これらの過程を通じて、半島の諸民族は「イタリア人 *Italoi, Italici*」⁽¹⁾ と呼称される一つの民族のように捉えられるようになった。同盟市戦争を経て新しく市民権を得たイタリア半島の人々について、*Syme* は「古い支配階層は崩壊し、その構造は変化した。イタリアと非政治的な社会階層がローマとローマの貴族に凱歌をあげた」と述べ、内乱を経てアウグストゥス政権の支持基盤になったと解釈している。

以上の点で「イタリア人」はローマ史を考える上で重要な要素のうちの一つと考えられ、ローマとイタリアの関係を考察する多くの研究がなされてきた。しかし研究者の多くは「イタリア人」という用語を明確に定めておらず「イタリア半島の人々の総体」という程度で捉えており、その史料状況を含めて十分な検討がなされていると

はいえない。⁽³⁾後に明らかにするが、共和政期の史料では「イタリア人」という名称は特定の文脈でしか用いられておらず、イタリア半島の諸民族全体の総称として恒常的に用いられていた言葉ではないと考えられる。つまり、多くの先行研究において用いられている「イタリア人」、そのうち少なくとも共和政期のものについては、同時代史料を反映させた言葉ではない。

このような事実には十分な意識が向けられていなかった背景に、ローマとイタリアの関係に関する研究の元来の目的が関係していると考えられる。十九世紀の研究者 Mommsen は、ローマの歴史を「イタリアキーンという種族全体の一つの国家への統一と呼ばれるべきだろう」⁽⁴⁾と述べ、前三世紀の時点でイタリア半島は高度に統一された、言わねば「イタリア国家」なるものを想定していた。⁽⁵⁾そして前二世紀後半に、ローマ市民権付与に関する争い、いわゆる「イタリア問題 Italian question」が起こり、同盟市戦争の原因になったとしている。⁽⁶⁾このような Mommsen の唱える「イタリア国家」は早くから否定され、後には同盟市戦争の原因に関する論争へと発展している。Brunt は、イタリア半島のローマ化は前一世紀の時点で完了しており、文化的に統合され同一民族のようになっていた。そして、イタリア半島の人々は、ローマの中での地位向上を求めて市民権を求めたとしている。Sherwin-White は、Brunt の解釈を否定し、同盟市戦争時の民族毎の立場の違いを考慮に加えるべきだとしている。サムニウム人はローマからの独立が目的であるのに対し、エトルリア人・ウンブリア人は市民権の獲得が戦争の目的だったとしている。⁽⁷⁾

このような解釈の違いは存在していたが、研究者の多くが同盟市戦争はローマ市民権を獲得するための戦争であり、それに先行する前二世紀はイタリア半島でローマ化と政治的統合が進展する時代と捉えていた。Mommsen の言う「イタリア国家」は否定されたが、後の研究もローマによるイタリアの統合の必然性を説明する点では Mommsen のスキームに従ったものだと言える。

Mommsen は、同盟市戦争の目的を市民権の獲得にあるとする従来の解釈に対して疑問を呈している。⁽⁸⁾ Mommsen は、反乱の目的はローマからの独立にあるとし、市民権付与の法律は戦争を有利にするために便宜的に出されたものとしている。⁽⁸⁾そして、反乱側が市民権を要求していたとする従来説は、ローマによるイタリアの統合という、言わば「国民国家史観」に基づいた解釈であり、イタリアがローマに統合されていく過程に必然性はなかったと述べている。⁽⁹⁾

これらの研究とは別に、イタリア半島の各々の民族に関する研究も古くから行われてきた。⁽¹⁰⁾特に近年の傾向としては、ローマ人の個々の民族に対する表象（イメージ）を視点に入れた研究が行われるようになった。例えば、Dench はサムニウム人を含む中部イタリアに住む山岳民族に対するローマ人の表象について考察している。それによると、ローマ人が抱いていた半島中部の民族の表象は、肯定的・否定的なものの間を揺れ動くものであって、その当時のローマと半島中部の民族の各々の立ち位置からなる関係性によって作られるものだとしている。⁽¹¹⁾また、Farchy は、共和政末期における政治闘争の中で、元老院議員たちがローマの政界の中で成功するために、自身の家の出自をラテン人やサビーニー人、エトルリア人等に關

連させながら権威づけてきたことを明らかにしている。¹²⁾

以上の研究動向を踏まえて本稿では改めて「イタリア人」について扱っていく。先行研究では同時代史料を反映せずに「イタリア人」という言葉を用いているため、いくつかの問題が生じていると考えられる。第一にイタリアの統合の時期に関する問題である。Bruni、Walbank等は、イタリア半島におけるローマ化を前二世紀にあると考え、この頃からイタリア半島の諸民族の中にお互いを同一視する傾向があったと考えている。¹³⁾ その結果、Sherwin-Whiteの Bruntに對する批判で述べたように、民族や地域の違いを考察の対象としていない。また、史料上「イタリア人」と表記されているものは、全て同列のものとして扱っており、各史料が全て同じ対象を指しているものと考え、それらの史料は全て連続性があるものと捉えていることにも問題があると思われる。

そのため本稿では第一に、共和政期、特に同盟市戦争以前の前二世紀の「イタリア人」に関する史料を再検討する。その際に、各史料が指す「イタリア人」は、誰を指しているかまたは史料毎の連続性は存在しているかについて再考する。先に述べたように、共和政期の「イタリア人」という言葉が特定の文脈でのみ使われていたとするならば、イタリア半島の諸民族はお互いをどのように認識していたのかについて考察していく。さらに「イタリア人」が、いつ、いかなる過程で半島内の全ての人間を指す言葉になったのか、その際に共通点となる基盤は何だったのかについても明らかにしていきたい。

2. 同盟市戦争以前

2-1. 前二世紀における「イタリア人」に関する史料

前二世紀の「イタリア人」の史料について、碑文とギリシア人の歴史家ポリュビオスの『歴史』をもとに検討する。

前一九三年に「イタリア人 Italici」（以下碑文史料は Italici で表記）と名乗る人々が、スキピオの名譽を讃えている碑文が、シチリア島で見つかっている。¹⁴⁾ また、イタリア半島のルーカーニアで見つかった前一二二年の里表でも Italici について言及されている。¹⁵⁾ Brunt は、特に前一九三年に Italici という自称が用いられていたことから、イタリア半島の人々がお互いを同一民族とみなし、統合していかうとする意思の表れであるとしている。そしてこれらの Italici という語が使用されはじめたことをイタリアの統合の過程ととらえ、同盟市戦争の反乱側の「イタリア人」に連なるものとしている。¹⁶⁾

前二世紀に自らをイタリア人と名乗る史料が存在するのは事実だが、これらの史料に関しては名乗っている人間、文脈に留意する必要がある。前一九三年の史料は、シチリアに土地を所有しているイタリア半島の住人が自らを称したものだと考えられる。前一二二年の里表は、ポリリウス・ラエナスが自らの功績を示したもので、シチリアに逃亡した Italici を投降させたという内容である。この Italici はシチリアに逃亡したイタリア半島の人間のことを指している。これらの二つの例から、この時代イタリア半島の外に出た際のイタリア半島の民族の総称として「イタリア人」という言葉が使

われていたことがわかる。⁽¹⁷⁾

次に、ポリュビオスの著作の中で言及している「イタリア人」について考える。ポリュビオスは、第二巻でイタリア半島北部の地誌について説明しおり、ここではアルプスの山麓までをイタリアとしている。⁽¹⁸⁾ さらに著作の中で、多くの「イタリア人 *Italoi*」(以下イタリア人と表記)⁽¹⁹⁾と説明される人々が現れている。例えば、前二〇二年のザマの戦いもしくはその前年の戦いで、大スキピオが率いていた軍団の一部に「イタリアの騎兵 *Italoi* *huestis*」がいる。⁽²⁰⁾ ここで言うイタリアスは、ローマ以外から徴兵された兵士のことを指していると考えられる。また、ハンニバルがイタリア半島で戦闘をしていた際に率いていた様々な民族の内一つに、イタリアが含まれていたとしている。⁽²¹⁾ 彼は、イタリアをイベリア人、リグーリア人、ケルト人(ガッリア人)、ギリシア人等と併記しており、これらの民族を「同一人種 *quosdamque*」や同一民族 *quosdamque* ではなく、法も習慣も言語も共通するものはない」と説明している。ガッリア人とリグーリア人をイタリアスと区別していることから、ポリュビオスのいうイタリアスとは、前三世紀までにローマの支配下に入ったイタリア半島の人々を指していると考えられる。さらにこの記述から、彼はイタリアスという人々をあたかも文化、言語等を共有する同一民族であるとして捉えていたと解釈することも可能である。ポリュビオスがイタリアスをこのように捉えている理由は、彼の『歴史』の目的と対象が関係していると思われる。ポリュビオスは『歴史』の目的を、ローマが地中海に覇権を確立する過程を描くこととしており、前三世紀までのイタリア半島の戦争は前史の内一つとして扱われ

ている。⁽²²⁾ そのためポリュビオスは、イタリア半島の個々の民族に関心を払っていない。「歴史」の中のイタリアスは、ポリュビオスがイタリア半島のそれぞれの民族に関心を払っていなかったため使われた名称であった。ギリシア人をはじめとするイタリア半島の外側にいる人間の捉え方もこれとほぼ同じだったと考えられる。

以上のことを総括すると、前二世紀の「イタリア人」の史料には半島の外側の人々が用いていた呼称、もしくは半島の外側の人々に対して向けられた呼称であったと言える。

2-2. 前二世紀のローマ人の視点

前項で前二世紀の「イタリア人」に関する史料は、イタリア半島の外の人間の視点及び、半島の外の人間に対して用いられていた呼称であることを明らかにした。Dion は、前二世の間にイタリア半島にローマ化が十分に進展していたことを根拠として、イタリア半島の各民族が「イタリア人」として互いを同一視していたとしている。しかし、近年、前二世紀のローマ化に関して多くの疑問が示されている。

イタリア半島におけるローマ化に関しては、イタリア半島の都市化、ローマ風の文化の浸透⁽²³⁾、ラテン語の普及 *Latinization* などが挙げられている。そのうち特にラテン語の普及がイタリア半島のローマ化として説明されていることが多い。⁽²⁴⁾ ラテン語の拡大に関しては、碑文史料などをもとに研究がなされており、エトルリアの南部、サビーニ人等は比較的早くからラテン語の影響を受けていたとされる。しかし、ラテン語の拡大の証拠となるのは、主に碑文による

史料だが、この碑文の内容はローマへの恭順を示すものでローマ人に向けて書かれたものである。⁽²⁶⁾これらの地域で一般的にラテン語が使用されていたことの証明にはなっていない。また、それ以外の地域、特にオスク系の言語を話す民族の多くは、同盟市戦争まで自らの言語を碑文に残していたことから、前二世紀の段階でのラテン語の普及は限定的なものであったと考えられる。以上のように文化等の共通性が存在していなことから、イタリア半島の民族は、互いを独立した異なる民族としてとらえていたと推測できる。

このことはポリュビオスの『歴史』の中から読み取ることができ。ポリュビオスは、前二二五年にアルプス以北のガツリア人の一部族であるガイサタイ族との戦争を記述するにあたって、ローマとその同盟軍の動員可能な兵の総数を示した表について言及している。⁽²⁸⁾この表はローマ人の歴史家ファビウス・ピクトルの著作を史料としており、各民族を単位として人数が記載されている。前項で述べたポリュビオスの視点を反映したイタロスと異なり、ローマ人がイタリア半島の各々の民族を個別に認識していたと考えられる。

また、ローマの同盟軍の戦争参加の動機については、「もはやローマの支配のため、同盟になるために戦争を行うとは考えずに、自分自身のため、自分の都市や領域のために危険に挑むのだと彼らは考えた」⁽²⁹⁾とある。第二次ポエニ戦争を含む半島外の敵の侵入がイタリア半島の人々に連帯意識を生んだという説もあるが、この記述から各民族は自らの利害に合わせて戦っていたと判断できる。

ローマ人が自らと他のイタリア半島の民族どのように捉えていたかをわがわがの史料もある。大カトー（以下カトー）は、晩年に

通称『起源史』と呼ばれる著作を残している。その第二、三巻はイタリア半島の諸都市の起源について言及していることから、カトーがイタリアに共通の歴史を見出そうとしていたとも解釈される。⁽³¹⁾確かに、イタリアの多くの民族の祖先をアポリギネース人だとしている。⁽³²⁾しかし、カトーは、ローマ人の起源はトロイア人にあるという説を採用しており、またサビーニ人の共通の祖先だと考えられていた伝説的な王サブスは、スパルタ人（ラケダーイモン人）の血統だとしている。そして、サビーニ人の厳格や *severus* はラケダーイモン人から由来するものであるとしている。アポリギネース人のようにイタリアの諸民族の共通の祖先にあたるものを想定していたとしても、その後には他の民族が混血することによって彼の時代のイタリア半島の諸民族は成り立っているということをカトーは強調しようとしていた。

別の断片からは、他の民族に対する態度を読み取ることができる。大プリニウスの引用によると、カトーは「（ギリシア人が）われわれを蛮人 *barbares* と呼ぶ。そして他の外国人よりもいっそうひどい罵りを浴びせかけ、われわれにオピキー *Opici* という汚いあだ名を与えている」⁽³³⁾という不満を書いていた。これは、ギリシア人にオスク系民族に対する蔑称である「オピキー」と呼ばれることに対しての不満であるが、同時にオスク系民族と同列に扱われていることへの不満であると解釈可能である。また『起源史』の第二巻では北部のリグーリア人についても言及されており、奸計を弄する人々とさられていた。さらに、カトーの記述から離れるが、山岳民族であるマルシー人に対しては、魔術を使う民族としてとらえていた。⁽³⁴⁾これら

のようにローマと文化的な類似性が少ない民族に対しては、ローマ人は文化的に劣等な野蛮人として捉えていたと考えられる。

反対に、前二世紀の段階で物質文明がローマよりも豊かだと思われていた民族に対しては、異なった解釈がなされた。早くから独自の文明を築き、ローマにも影響を与えたエトルリア人に対しては、豊かさがゆえに享楽に耽りかつての栄光を失ったと考えられていた。そのことを象徴するように、彼らは度々「太ったエトルリア人 obsus Etruscus」⁽³⁶⁾と揶揄されるようになった。

これと似た例に、カンパーニアの都市カプアが挙げられる。カンパーニアは肥沃な土地であり、中心都市カプアは半島一豊かな都市として有名だった。しかし、第二次ポエニ戦争の際に、ハンニバルに降伏した。これも「カンパーニアのカプアの人々は、土地の肥沃さゆえに豊かさを手に入れ、贅沢と浪費におぼれた」そして、「手元にある豊かさを保持することに耐えきれず、ハンニバルを呼び寄せ、ローマ人から致命的な激しい懲罰を受けた」と説明されており、豊かさが精神を弱め、結果自らの身を滅ぼしたという解釈がなされている。

以上からこの時代のローマ人は、自らの軍事的優位性を背景として、イタリア半島の様々な民族を劣った人々として認識していた。その際、文化的な類似性が比較的少ない民族に対しては、彼らの文化を理解したい野蛮人としてとらえ、反対に高度な文明を持つ民族には、豊かさが精神を軟弱にしたなど、各々の違いに合わせて解釈の仕方を変えた。

3. 同盟市戦争と内乱期

3-1. 同盟市戦争とスツラ派とマリウス・キンナ派の内乱

同盟市戦争は、前九一年にアスクルムでの暴動に端を発し、半島中部のマルシー人とサムニウム人が中心となって戦争が行われた。翌年の後半には、エトルリア人とウンブリア人もローマから離反した。これと同時にユールィウス法が成立し、ラテン人にローマ市民権が付与された。その次の年の初めに、プラティウス・パピリウス法、ポンペイウス法が可決された。その結果、その後イタリア半島のうちパドゥス川以南の全同盟市にローマ市民権を付与し、パドゥス川以北にはラテン市民権を付与されることになった。

同盟市戦争が、ローマとイタリア半島の諸都市・民族の關係に大きな変化をもたらしたことについては間違いないが、同盟市戦争の際の「イタリア人」についても再考を要する。開戦後、反乱側のマルシー人・パエリグニ人等の半島中部の民族は、コルフィニウムを「イタリカ」と改名し、自らを「イタリヤ」と名乗り、ローマと同じような政治体制を築いたとしている⁽³⁸⁾。そのため同盟市戦争は史料上、「イタリア戦争 Bellum Italium」と呼ばれることが多い。しかし、この同盟市戦争の際の各反ローマ勢力の連携と「イタリア」としての連帯性に関しては疑問が出されている。特に、開戦当初から参加していたマルシー人・サムニウム人らに対して、前九〇年にローマとの同盟から離脱し、反乱側についていたエトルリア人・ウンブリア人らは、この年の戦局を判断してから離反したと考えられる⁽³⁹⁾。当初から反乱を計画していた半島中部の民族は同じイタリア半島の

各民族に参加を求めていたため「イタリア」を名乗ったと考えられるが、その考えが後に戦争に加わったエトルリア人等にも共有されていたとは言えない。

同盟市戦争の終結後、スツラとマリウス・キンナ派との間で内乱が起こっている。この内乱の最中である前八二年にサムニウム人は、スツラの部隊とコツリーナ門で衝突している。ストラボンによるとこの戦いに勝利したスツラは、サムニウム人の捕虜を処刑し、さらに「財産没収刑に処し、サムニウムの名を持つものをすべてを皆殺しにするかイタリアからすべて追放するまでやめなかつた」としている。⁽⁴⁰⁾「サムニウムの名を持つものすべてを皆殺しにするかイタリアからすべて追放するまでやめなかつた」という表現から、サムニウム人の民族的アイデンティティが消滅したと考えられる。

3-2. 同盟市戦争後の民族表象

同盟市戦争と戦争中に出された市民権付与の法律を契機として、ローマと他の民族との関係は大きく変化した。前二世紀の時点では、イタリア半島のローマ化は進んでいなかったことを指摘したが、この同盟市戦争とその後の内乱、スツラによる退役軍人の入植がイタリア半島のローマ化の本格的な始まりだと考えることができる。市民権付与の法律によってイタリア半島の新市民がローマの政治体制の中に組み込まれたこと、またスツラによる退職軍人の入植をしたことがラテン語の浸透に寄与したと考えられる。⁽⁴¹⁾

イタリア半島にローマ化が進むことにより、ローマ人は半島中部の民族に対して、より精神的な親和性を感じるようになったと考え

られる。特に、サムニウム人というイタリア半島の中でローマ人に次ぐ第二の人口を持ち、時としてローマを脅かす存在であった人々が事実上消滅したことの影響は大きかったと言える。旧サムニウム人の居住地域に住む人々は、サビーニ人らと合わせて、「サベッリー人」として認識されるようになった。⁽⁴²⁾ローマ人と敵対し、否定的にとらえられていたサムニウム人がサベッリー人としてサビーニ人と同じく、厳格さを持つ民族として捉えられるようになった。

また、マルシー人に対する認識も変化している。マルシー人は、同盟市戦争の中心となった部族であったため、同盟市戦争は「マルシー戦争 *bellum Marsicum*」とも呼ばれた。マルシー人は、ローマ人に怪しげな魔術を使う人々として認識されていたが、同盟市戦争の苦戦もあつて、マルシー人は勇敢な、武勇に長けた人々として解釈されるようになった。⁽⁴³⁾

以上のことから同盟市戦争の結果、ローマ人は半島中部の民族対して勇敢な民として認識するようになった。このような変化は、共和政末期のローマ人の自己認識にも関係している。つまり度重なる内乱のために、ローマ人は自らが道徳的に退廃したと認識するようになった。そのため、サベッリー人やマルシー人などの半島中部の民族は、ローマ人が古来もっていた徳である *virtus*（勇敢さ、男らしさ）を守っていると考えられた。つまり、同盟市戦争の結果、それまでの文化的に劣った人々と認識されていた半島中部の民族は、*virtus* を持つ人々というローマ人の理解の枠組みに収まりやすいうに解釈されるようになった。

このように同盟市戦争の結果、一部の民族はローマ人から肯定的

に捉えられるようになったが、反対に一部の民族は相対的に否定的な印象を持つようになったと考えられる。紀元前二世紀末の北方の民族に対する苦戦によって、共和政末期からローマ人のガッリア人に対する見方に変化が見られた。それは、直接戦争をしたアルプスの向こう側のガッリア人と同様に半島内のうちの一部のガッリア人も、野蛮人 *barbarae* としてより強く認識されるようになり、他のイタリア半島の民族と区別されるようになった。⁽⁴⁴⁾

4. アウグストゥス時代

4-1. アウグストゥス時代の詩人

オクターウィアヌス(後のアウグストゥス)は、前三二年に全イタリアの都市から忠誠誓約を受け、翌年にアントーニウスに勝利し、後に事実上の独裁を開始した。アウグストゥスは自らの腹心であるマエケーナスを通じて、彼の文学サークルに属する詩人に詩の作成を依頼した。このような関係からこの時代の詩人はアウグストゥスの影響を受けていたという説が多く示されている。Syme は「アウグストゥス時代」の文化をアウグストゥスの意向を強く反映させたものとして扱っている。⁽⁴⁵⁾ それによると内乱の時代にローマ人の倫理観は低下した、もしくは低下したものととして解釈されていたため、アウグストゥスは「共和政の復帰」、「伝統への回帰」を掲げていた。多くの研究においてアウグストゥス時代はイタリアの統合は完成されたものとして個々の民族の違いを考察の対象としていない。しかし、この時代は諸民族を互いに別々のものとして認識する傾向はまだ存在していた。むしろこの時期は、イタリアの様々な民

族がローマに歴史的に貢献したことを示そうとしていた。⁽⁴⁶⁾ それに合わせる形で伝説・神話の再解釈が行われた。

その例としてホラーティウスとその詩を挙げる。ホラーティウスは内乱の時期に従軍をしていたこともあったが、前三八年にマエケーナスのサークルに参加し、後に彼からサビーニー人の領域の農園を与えられている。ホラーティウスにとって、内乱の混乱した時代は、ローマ人の精神が衰退した時代として捉えられるようになった。そして、マエケーナスからもらったサビーニー人の土地とそこに住む人々(もしくは伝説的なその祖先)は、彼には古き良き精神の鏡に映った。そのため、彼はその土地とそこに住むサビーニー人を讃える詩を作っている。⁽⁴⁷⁾ 例えば内乱の時代にローマ人の精神が墮落したことを述べた詩があるが、その中でハンニバル、ピュッロス、アンティオコスなどの過去のローマを脅かした外敵に勝利した人々はサビーニー人の教えを受け継いだ人々であったとしている。⁽⁴⁸⁾

一方で、ホラーティウスは他の民族に対して言及もしている。クラッススの軍団を引き合いに出しながら、レーグルスが *virtus* の重要性を訴えている詩がある。前五三年にカルラエでバルティアの軍団に敗北したクラッススの軍団の一部はバルティアの捕虜になっている。彼らについてホラーティウスは以下のように述べている。

「クラッススの兵士は、バルバロスの女との婚約により
恥ずべき夫そして敵として生きながらえた。

クーリア(元老院)も伝統も逆転した。

メディア王の下、舅の軍隊で

マルシー人やアプリア人は疲弊した。⁽⁴⁹⁾

Some は、この箇所を「イタリア人」を否定的に捉えていた例と解釈しているが、ホラティウスは、ローマの伝統を転覆させた人としてマルシー人とアプリア人という特定の民族を挙げて否定的に扱っている。

これらホラティウスの詩から、アウグストゥス時代であっても自らと関係が深い民族を称揚し、他の民族と差異を強調していると見える。

4-2. ウェルギリウスとエトルリア人

ウェルギリウスの作品の中にも、自らと関係の深い民族を称揚する傾向が見られる。彼は、北イタリアの都市マントウアの近郊で生まれ育った。マントウアは、かつてエトルリア人の都市であったが、前五世紀にガッリア人が侵入してきた際に征服された。共和政末期の頃からマントウアの人々は、かつての出来事をもとにして自らをエトルリア人の子孫とみなすようになっていた。ウェルギリウスは詩においてマントウアを讃える際、かつてエトルリア人の都市であったことを言及している。

彼の代表作である『アエネイス』の中では、この時代のローマに関する多くのものの起源を伝説の時代と関連させて説明している。そのうち当時ローマで行われていた祭儀の多くがエトルリア起源だと説明しており、彼が詩の中でエトルリア人を讃えようとしていることがよく指摘される。

また、『アエネイス』では、ローマの建国神話に関する再解釈もなされている。エンニウスやカトーの記述に見られる従来のアエネーアース伝説では、エトルリア人の王メゼンティウスがアエネーアースと戦ったことが述べられており、エトルリア人は敵として位置づけられていた。一方、『アエネイス』では、アエネーアースは、エトルリア人のエウアンドロスとその息子パッラスと同盟を結んでいる。そして、メゼンティウスは、エトルリア人の中での裏切り者という位置づけになっており、大半のエトルリア人はエネーアースに与するようにしている。つまり、伝説に再解釈を加え、エトルリア人をローマの建国神話上の敵である以上に、アエネーアースの最大の協力者としている。⁽⁵¹⁾

4-3. 『アエネイス』の「イタリア人」

ウェルギリウスは『アエネイス』の舞台となる伝説の時代に「イタリア人」を登場させている。従来のアエネーアース伝説は、トゥルヌスからラテン人とトロイア人との戦争であったのに対し、『アエネイス』ではトロイア人を除くアエネーアース側の同盟軍とトゥルヌスらの軍団は、双方ともに「イタリア人 [Italus, Ausones]⁽⁵²⁾」と表現されている。ウェルギリウスは、『アエネイス』を「イタリア人」の戦争として描こうとしているのうかがえる。多くの研究ではこの古イタリア人をラテン人と同一視して説明しているが、それぞれの軍団の部隊表を見ると多くの民族を参加させているのがわかる。トゥルヌスら同盟軍は、はじめに「その時豊かなるイタリアの地にいかなる勇士が咲き誇ったか」と述べ、カタログス形式に

において、構成している民族を列挙している。

- トウルヌスら同盟軍 (7. 641-816)
 - ・ ラテン人の一族のルトウリー人の都市アルデア：トウルヌスが率いる。
 - ・ エトルリーア人の都市カエレ：メゼンティウスが率いている。
 - ・ サビーニ人
 - ・ ティーブルやブラエネステ等のラテン人の都市
 - ・ ヘルニキー人、アエクイー人、ファリスキー人、ウォルスキー人。オスキ人ら半島中部の民族

- アエネーアースの同盟軍 (10. 163-215)
 - ・ リグーリア人
 - ・ コサエ、ポプロローニア、イルウア、アーシラス、ピーサエ、マントウア等のエトルリーア人の諸都市。

『アエネーイス』以前の伝説は、トロイア人とラテン人の戦争として描かれていたことを述べたが、これらの部隊表から、ウエルギリウスが可能な限り多くの半島の民族をこの戦争に加え、戦争をより大規模なものとして描こうしているのがわかる。従来のラテン人とトロイア人の戦争という構造を拡大させ、エトルリーア人を加えているだけでなく、半島中部・南部の民族、そして北西部のリグーリア人を登場させている。特にポリュピオスがイタロスの中に含めていなかったリグーリア人も戦列に加えられており、ウエルギリウ

スが、彼らも古イタリア人に含めようとしていることがわかる。

『アエネーイス』では、従来のローマ建国の神話を再編して、イタリア半島の多くの民族を参加させようとしたことがうかがえるが、これは、ただ戦争の規模を大きくするためだけのものではないと考えられる。例えば、ギリシアの英雄ディオメデスも登場するが、彼は戦争に加わっていない。これは、ウエルギリウスがこの戦争を古イタリア人のものとして描こうとしており、参加させる人間を慎重に選り分けようとしていることが考えられる。つまり、この戦争に参加する人間が「イタリア人」であつて、ディオメデスはギリシア人であるから戦争に参加させたいと考えられる。

4-4. 「イタリア人の歴史」、共通する歴史の創造

『アエネーイス』では、舞台となる伝説の時代に神々の予言という形をとってローマ人の歴史が示されている。代表的なものは、六歌の「英雄のカタログス」(6. 756-886)と八歌の盾の描写(8. 630-728)がある。

六歌の「英雄のカタログス」(6. 756-886)は、アエネーアースが冥界に降りた際に父アンキセースが、「イタリアの血筋を継ぐどのような子孫が待っているか *qui manent Italia de gente nepotes*」と述べ、未来に生まれてくるローマの歴史の英傑を順々に紹介している。

また、八歌では、アエネーアースが神々から武器を賜っているが、その盾には「イタリアの歴史とローマの勝利 *Illic res Italas Romanorumque triumphos*」(8. 630-728)の場面が象られていると説明して

いる。双方とも伝説の時代から見た未来を予言する形で歴史を描いているのだが、いずれもその冒頭に、ローマ人だけではなく「イタリア人」の歴史でもあることを述べている。実際に描かれている人物・出来事の多くはローマに関するものだが、『アエネーイス』を讀んだイタリア半島の人々は、予言で示される歴史を自らの歴史として捉えるようになったと考えられる。

『アエネーイス』にはローマの建国神話と同時に、部隊表や予言で示される歴史によって、「イタリア人」とは誰か、そしていかなる人々かということを示そうとする意図があった。

先に述べた八歌の盾の中央部には、アクティウムの海戦の様子が描かれており、『アウグストゥス・カエサルが「イタリア人」を戦闘へと率いている』⁽⁵⁵⁾としている。アウグストゥスが率いているこの「イタリア人」は、あたかもアエネーアースと戦った古イタリア人の子孫のように描かれている。このようにして『アエネーイス』で述べられた古イタリア人の過去（『アエネーイス』での出来事）と現在（アクティウムの海戦での協力）という二つの点をもとに半島内の人間の中に、共通体験（「イタリアの歴史」）が創りだされたと言える。

さらに叙事詩に描かれる古イタリア人は *virtus* を持つ人々として描かれており、ユーノーの祈りの箇所では、将来において古イタリア人の *virtus* がローマ人に受け継がれることが述べられている。⁽⁵⁶⁾つまり、『アエネーイス』の戦争に参加した人々が、アウグストゥスが率いている「イタリア人」の祖先であり、彼らの *virtus* によってアウグストゥスを支えているということが『アエネーイス』の中で

示唆されている。

ウエルギリウスは、ホラーティウスと同じように自民族を称揚しながらも、共通の歴史と精神性を持ち、現体制の立役者となる「イタリア人」という枠組みを創りだそうとしていた。

また、ウエルギリウスが「イタリア人」を強調した理由の一つに、ガッリア・キサルピーナのの人々の扱いも関係あると思われる。共和政末期に一部のガッリア人の評価がより低いものになったことは述べたが、ガッリア・キサルピーナの人々が『アエネーイス』を讀み、自らを「イタリア人」と認識すれば、かつてのローマ人の敵だったという記憶を弱めることが可能だった。

「イタリア人」は、共和政期では半島内で一般的に使われる言葉ではなかったため、何らかの歴史的背景や表象を背負う言葉ではなく、いかなる概念を付随させることも可能だった。そのためウエルギリウスは、*virtus* という肯定的で、ローマ人にとつて理解しやすい概念を付加させたと考えられる。『アエネーイス』の中で、半島の全ての民族を「イタリア人」とし、共通の歴史体験を持ち、*virtus* という民族の性格をもつものとして創り上げること、特定の民族が持つ歴史的な汚点を極小化することができたと考えられる。例えば贅沢のせいで衰退したと考えられていたエトルリア人も *virtus* をもつ人々だと自己認識することができた。また、ガッリア・キサルピーナに住む人々にとつては、「ローマ人の敵」ではなく、ローマと協力した「イタリア人」と自己認識を改めることができた。

『アエネーイス』の中の「イタリア人」は各民族の差（表象の良

し悪し、過去のローマと関係)を極小化させ、現体制の立役者であると自己認識することが可能になるという効果があったと考えられる。

4-5. 「イタリア人」に関する歴史の再解釈

『アエネーイス』により「イタリア人」という様々な民族を統合した自己認識が確立した。その過程の中で、ローマ市民権の付与が「イタリア人」の統合の理論として解釈されるようになった。

ウエルギリウスの同時代の地理学者ストラボンが、「昔の人々はオイノートルリアのことをイタリアと呼び、(オイノートルリアは)シケリアの海峡からタラスの湾とポセイドニアの湾まで広がっている。しかし、(イタリアという)この名は力を持つと広がっていき、アルプス山麓に到った」と述べており、地理名称としてのイタリアが指し示す範囲が拡大したことを指摘している。さらに同じ個所で、「ローマはイタリアオーテースたちに自分たちと同等の自治権を付与してから程ないある時期に、このおなじ特権をアルプスより内側のガラティア(ガツリア)、ヘネティー(ウエネティー)両族にも分与し、かれらをすべてイタリアオーテースまたはローマイオスという肩書で呼んだ」としており、ローマ市民権を付与することで「イタリア人」が誕生したと解釈している。地理名称の拡大と平行するようになり、市民権と「イタリア人」も拡大したと考えられるようになった。

また、ウエルギリウスの死後、『アエネーイス』は教育にも利用されるようになり、普及していった。そして後の世代のイタリア半

島の人々にウエルギリウスの提示した「イタリア人」が定着するようになっていったと考えられる。その結果、「イタリア人」に基づいた歴史の再解釈が行われるようになった。

例えば、大ブリニウスは、『博物誌』の中でイタリアの地理を説明したあと、結論としての前二二五年の戦争を挙げている。

「これが、神々に捧げられたイタリアであり、これらがその国民の諸民族や諸都市である。さらに、このイタリアは、L・アエミリウス・パプスとC・アテイーリウス・レーグルスが執政官であった時に、ガツリアで坂乱が起ったという知らせを受けると、どこか外国の援軍もなかっただけでなく、その頃パドゥス河の向こう(ガツリア・キサルピーナ)の援軍もなかったが、八万の騎兵と七十万の歩兵を用意した」⁵⁸⁾

これはポリュビオスの記述(『ヒストリア』注16)を参考にしていると思われる。ポリュビオスは、民族毎に記述しているのに対して、大ブリニウスは全ての民族をまとめて計算しており、前二二五年の戦争をイタリア半島の人間が一体になって戦ったかのような解釈をしている。

おわりに

本稿では、MouritsenやDench等のイタリアとローマに関する近年の研究を踏まえながら、従来自明のものとされてきた「イタリア人」について検討していった。本稿で明らかにしたことを確認して

いくと以下のようなになる。共和政期、特に前二世紀の時点では、ローマ化は進んでおらず、この時代の「イタリア人」に関する史料は、イタリア半島の外にいる人間からの視点、もしくはイタリア半島の外に向けられた呼称であった。一方、イタリア半島の内部では、文化的な差異からお互いを同一視する共通性は存在しなかったと考えられる。ローマ人の視点からも、自らと「イタリア人」という対比ではなく、個々の民族が持つ性格と自らを見比べて各々の民族像を創り上げたと考えられる。その際にローマ人は、民族毎に様々な解釈を加えて自らの優位性を主張しようとしていた。しかし、共和政末期の混乱の中でローマ人は自らの精神が衰退したものと捉えるようになったこと、そして同盟市戦争の苦戦と戦後の処置によって自らとイタリア半島の諸民族の関係を再解釈するようになった。特に、戦争で活躍した半島中部のマルシー人は勇敢な民族と捉えられるようになり、サビーニ人はローマ人が持っていた古来の精神性を保持する民族とされるようになった。このような民族の差異を強調する傾向はアウグストゥス時代になっても続いており、この時代の詩人たちはローマと関連付けて自らと関係が深い民族を称揚しようとしていたと言える。このような時代的背景の中、ウエルギリウスは「イタリア人」を創りだそうとしていたと考えられる。

共和政期では、「イタリア人」はイタリア半島内では用いられていなかったと考えられるが、ウエルギリウスはその著作『アエネーイス』の中で、ローマ人の起源を語ると同時に「イタリア人」像を創りだそうとしていたと考えられる。『アエネーイス』の中では、可能な限り多くのイタリア半島の民族が戦争に参加しており、イタ

リア半島全ての人間が自らの由来を『アエネーイス』に求めることができた。そして、『アエネーイス』で登場する古イタリア人は、*Æneïdes* というローマ人の価値観に合った性格を持ち、後にアウグストゥスに協力して戦う人々の祖先として描かれていた。『アエネーイス』を読んだイタリア半島の人々は、自らを「イタリア人」と見做せば、現在のアウグストゥス体制の立役者であると自己認識することが可能だった。ウエルギリウスの言う「イタリア人」は『アエネーイス』とともにイタリア半島の人々に定着していった。

最後にこれまで明らかにしてきたことから今後の研究の展望を示したい。本稿では、「イタリア人」をいう概念がイタリア半島全ての民族を指し示すものとして価値を持つに至ったのは『アエネーイス』によるものと考えられる。『アエネーイス』を読んだ人間は、自らを「イタリア人」として自発的に認識するようになったと考えられる。ウエルギリウスは、ローマ人とイタリア人を別のものとして捉えていたが、ローマ市民権が全イタリア半島の人間に付与されてから、世代を経るに従ってローマ人とイタリア人の境界も判然としなくなってきたと考えられる。「イタリア人」は地理的な制約がある概念であるのに対し、ローマ人という地理に縛られない概念の方が優位に立ってきたと考えることも可能である。このように考えるならば、大ブリニウスの後の世代には「イタリア人」がどのような価値を持っていたか、そして属州民、*hellenes* などと対比される「イタリア人」としての独自性はどの時代まで存在し得たのかという問題が想定できるだろう。以上のことを今後の研究課題として本稿を締めくくりたい。

註

・固有名詞の表記は原則としてラテン語形で統一する。固有名詞をカタカナで示す際、母音の長短は可能な限り示す。地名はラテン語の読みを採用するが、一部は慣例的な読み方を採用する(例：シチリア)。
 ・民族名に関しては「地名＋人」(例：エトルリア人)もしくは「民族名＋人」(例：サビニー人)で示す。ガットリア人の部族に関しては、下位分類として「族」の名称を用いる(例：インスブレス族)。
 ・参照した文献に関しては、初出時のみ全ての情報を記し、二度目以降は著者名と出版年のみ記載する。

・本稿で用いている略語は、以下の通りである。

ILLRP = A. Derassi (ed.), *Inscriptiones Latinae Liberae Rei Publicae*. Florentiae, 1963-65.

F = G. Henzen, Ch. Huelsen, E. Lommatzsch (ed.), 1893-1943, *Corpus Inscriptionum Latinarum*, Vol. I.

- (1) 統合の時期の問題は後述示すが、P. A. Brunt, "Italian Aims at the Time of the Social War." *The Journal of Roman Studies*, Vol. 55, 1965, p. 90-109. の中では同盟市戦争が統合の完成だとしている。p97-101. マウグストゥスの治世の始めとするのは A. Keaveney, *Rome and the unification of Italy*. London, 1987, p.91-192. また、治世の終りに完成したとするのは Salmon (1982), p.1, 160. Salmon の説へ、マウグストゥスによる意識的な統合については 145-146. また、idem, "Cicero, Romanus an Italicus Anceps?" Martyn, J. R. C. (ed), *Cicero and Virgil: studies in honour of Harold Hunt*, Haklert, 1972, p.86. 同様に H. Mouritsen *Italian unification: a study in ancient and modern historiography*. London, 1998, p.51. では統合が治世の終わりに行われたとしている。
- (2) R. Syme, *The Roman revolution*. Oxford, 1939, p.8. 'Italy and the non-political orders in society triumphed over Rome and the Roman aristocracy'
- (3) 「イタリヤ人」の史料を研究対象としている最も初期のものに J.

MacInnes, "The Use of 'Italus' and 'Romanus' in Latin Literature, with Special Reference to Virgil", *The Classical Review*, Vol. 26, No. 1, 1912, pp. 5-8. の中がある。この研究では、ラテン語の各史料から'Italus'を拾い上げて検討している。この中では、「イタリヤ人」に関する史料はウエルギリウスの『アエネーイス』に特に多く用いられていることが指摘されている。

(4) T. Mommsen, *Römische Geschichte*, 1. 6.

(5) 「イタリヤ国家」の訳語は、Mouritsen, 1998, p.27.

(6) J. Beloch, *Das italische Bund unter Roms Hegemonie: staatsrechtliche und statistische Forschungen*. Leipzig, 1880, p.199.

(7) A. N. Sherwin-White, *The Roman citizenship* (2nd ed.), Oxford, 1973. (1st 1939), p.173, p.134.

'There is no need here to discuss the preliminary political skirmishes or the war itself by which the Italian allies secured the Roman franchise' という文は、同盟市戦争の究極的な目的は、市民権の獲得によるものだったと結論づけられている。

(8) Mouritsen, 1998, pp. 164-165.

(9) Mouritsen は、Mommsen から多くの研究者が典拠としているマッピアノスの史料的な問題を指摘し、彼が言う「イタリヤ問題」は存在していなかったとしている。マッピアノスに関しては、pp.5-22. Mommsen に関しては pp. 23-37 で彼の生きた時代背景も含めて考察している。

(6) *ibid.* p.39.

(10) サムニウム人については、E. T. Salmon, *Samnum and the Samnites*, Cambridge, 1967.

ガッリマ・キサルバーナについては G. E. F. Chilver, *Cisalpine Gaul: social and economic history, from 49 B.C. to the death of Trajan*, New York, 1975. ヘルローマ人に関しては、最近の G. B. Dominigue, *La Civilisation étrusque*. Fayard, 1999. *idem*, *Les Etrusque*. (Que Sais-je?) PUF, 2005.

(11) E. Dench, *From barbarians to new men: Greek, Roman, and modern*

- perceptions of peoples from the central Apennines*. Oxford, 1995, pp.67-108.
- (12) G. D. Farnes, *Ethnic identity and aristocratic competition in Republican Rome*, Cambridge, 2007.
- (13) Brunt, 1965, p.100, F.W. Walbank, "Nationality as a Factor in Roman History." : *Harvard Studies in Classical Philology*, vol. 76, pp.145-168, 1972, p.152, Keaveney, 1987, p.190, 等。「イタリア人」の統合の時期に関する問題点(注)これらの研究(注)も以前から指摘されてくる。例) Syme, 1939, p.89, Italy had now become politically united through the extension of the Roman franchise, but the spirit and practice of government had not altered to fit a transformed state, 及び同頁注②。
- (14) *ILLRP*, 320, =^F, 612.
- (15) *ILLRP*, 343, =^F, 845.
- (16) Brunt, 1965, p.100, Walbank, 1972, p.152.
- (17) 前二世紀にテューロス島で発見されている「イタリア人」の史料に関しても同様のことが言える。
- (18) Polybios, 2, 14, 4-6, しかしながら, Mouritsen によるとポリュビオスが用いている「イタリア」は恣意的な用語であり, 状況によって指すものが異なる(注)と云う。Mouritsen, 1998, p46-47, 例として, 6, 13, 4, には Ager Romanum のみを指す(注)と云う。
- (19) ポリュビオスの記述の中には *traiōs* 以外に *traiōting* があるが, 本稿では同列のものを見做す。
- (20) 前二〇三の戦いは, Polybios, 14, 8, 6, サマの戦いは 15, 9, 8.
- (21) Polybios, 6, 21, 4-5.
- (22) Polybios, 11, 19, 4.
- また, (注)の箇所 *oi oiōthōs* と *oi oiōthōtēs* の二つは, Walbank によると *oi oiōthōs* (今回は「同一人種」と訳した)と *oiōthōtēs* (同様に「同一民族」と訳す)より巨大なグループを指している(注)と云う。F. W. Walbank, *A Historical Commentary on Polybios*, Oxford, 1957-79, v.1 p.275.
- また, ハンニバルがローマと戦争を進める際にローマの同盟市に訴えたのは「イタリア人に自由を復活 *την ελευθερίαν ἀναστήσειεν* *traiōtēs*」であった。ハンニバルが実際に「イタリア人の自由」を訴えたかどうかは不明だがこの場合の「イタリア人」もイタリア半島の外側の人間の視点である(注)と云う。
- (23) Polybios, 1, 71, 7, 及び 2, 1, 1, 3, 1, 10, 等
cf. Walbank, 1957, p.40.
- (24) Mouritsen, 1998, p.62-66.
- イタリア半島のローマ化に関しては, 別の問題がある。都市化に関しては, エトルリア人はローマよりもはるかに早い段階から都市文明を築いていた。またカンパニアや半島南部もローマよりも早く都市化していた。これはギリシア人の影響によるものである。都市化が最も典型的な例だが, 前二世紀までのイタリア半島ではローマよりもギリシアの影響が強かったと言える。言わば, ギリシア化ともいえるべき状況が起こっており, その点で考えれば前二世紀のローマはギリシアの影響が少なかつた地域の一つであるといえる。続く前二世紀になってもローマは普及させられるほどの文化的な影響力を持ちえなかつた。
- (25) Brunt, 1965, pp.98-100.
- (26) Mouritsen, 1998, pp.79-80.
- (27) *ibid.* p. 81, 及び Salmon, 1967, pp.122-123.
- (28) Polybios, 2, 24, 3-14.
- (29) Polybios, 2, 23, 12.
- (30) Brunt, 1965, p.100, Brunt は, ポリュビオスの 2, 23, 12, の箇所について反対の解釈を(注)と云う。
- (31) A. E. Astin, *Cato the Censor*, Oxford, 1978, pp. 228-229, しかし, Astin は『起源』の二・三巻にリグーリア人が含まれていること, 各都市の起源について述べるという手法は, カトー以前の歴史家の延長線上に位置している(注)と考えられる(注)だから, 最終的には否定している。同じように解釈

- しているものとして Sherwin-White, 1973, p. 132. におぼろげにカトローのころからイタリアの精神的な一致が見られると述べている。この点では具体的なこととは述べられていないが、カトローの『起源史』をもとにしたと考えられる。
- (32) オイノトリア人(ギリシア人の半島の南方の民族に対する呼称)もアポリギネース人がその祖先だとしている。
- (33) Pinus, *Naturalis-Historiae*, 29, 7. (Cato, *Murice filii*), Dench, 1995, p.67.
- (34) Lucilius, 605-606, 等
- (35) Mourisen, 1998, pp.51-86.
- (36) Caullus, 39, 11. Faney, 2007, pp.139-140. Briquel, 2005, p.76. 似たような解釈は p8. Diodoros, 5, 40, 4.
- (37) Alhenais, *Deipnosophistai*, 12, 528, a-c. ポリュビオス『歴史』の第七巻の引用として述べている。豊かさが精神を軟弱にするという考えは、ヘーロドトスなどで示されており、ギリシア人の影響があったかどうかは定かではないが、ローマ人も同じような考えを持っていたと考えられる。cf. Caesar, *Bellum Gallicum*, 1, 1, 2.
- (38) Diodoros, 37, 2, 4-7, Strabon, 5, 4, 1.
- (39) Sherwin-White, 1973, p.138, Mourisen, 1998, p.139.
- (40) Strabon, 5, 4, 11.
- (41) Mourisen, 1998, pp.61-62.
- (42) Dench, 1995, pp.104. またローマとサビーニ人との関係に関して言えば、カトローのように自らをサビーニ人の子孫と見做し、サビーニ人を高く評価する人々はいた。Faney は、そのような観点から共和政末期の状況を想定しているが、Dench は、ローマ人が一時期サビーニ人に対して否定的な印象を与えていたとしている。そして同盟市戦争後に、サビーニ人の評価が上がったとしている。Dench, 1995, pp.89-91.
- (43) マルシー人の同盟市戦争時の勇敢さについては、Cicero, *Pro Vatino*, 36, Strabon, 5, 4, 2, Appian, 1, 46.
- (44) Cicero, *Pro Balbo*, 32, Livius, 7, 24, 4-8.
以前からガッリア人はローマ人にとって *barbares* であったことは変わりなかったが、特に共和政末期に前二九〇年の「ガッリアの劫掠」が注目されるようになった。cf. J. F. Gaerter, "Livius's Camillus and the Political Discourse of the Late Republic", *The Journal of Roman Studies*, Vol. 98, 2008, pp.27-52, pp.48-49.
- (45) Syme, 1939, pp.446-448.
- (46) Briquel, 2005, p.85.
- (47) Horatius, *Carmina*, 3, 1, 17 は「自身のサビーニ人の谷 *vallis Sabina* は金に換えられない」といふの価値を誇っている。
- (48) Horatius, *Carmina*, 3, 6, 33-39, Dench, 1995, p.104.
- (49) Horatius, *Carmina*, 3, 5, 5-12.
これに限らずホラーティウスはマルシー人に対しては否定的な表象を加えることが多い。Horatius *Carmina*, 3, 14, 17 では「アウグストゥスの遠征からの帰還(前二四年)を祝った歌であるが、その際に過去の内乱について言及しており、スパルタクスの反乱と並んでマルシー戦争 *Marsus duellum* を挙げている。cf. *Epodon*, 14, 3. *Carmina*, 1, 1, 28. 「ブルノーの猪 *Marsus aper*」もそれに含まれる可能性がある。
- (50) Syme, 1939, pp.286-287.
- (51) Briquel, 2005, pp.85-86. また「ウエルギリウスとメントゥアについては *idem*, 1999, p.236.
- (52) 上村健二「ウエルギリウス『アエネイス』: *maius opus* の解釈をめぐって」『西洋古典論集』六巻一九八九年、五三―七五頁。アエネアースの同盟軍とトルヌスの同盟軍を双方とも「イタリア人」と呼んでいる例は「8, 331-332, 8, 513, 9, 530-534, 11, 591-592, 等多数。また、以下『アエネイス』の伝説の時代のイタリア人 *Italus, Ausones* を「他の「イタリア人」と区別するために古イタリア人とする」。
- (53) 小川正廣「ウエルギリウス研究: ローマ詩人の創造」京都大学学術出

版会、一九九四年。p.488.では、『アエネーイス』での戦争構造の改変を、ラテン戦争(前三四〇―前三三八年)の歴史的事実の反映だとしている。

cf. B. Maurizio, *Forging Identities*. J. Martin, P. Rene. (ed). *Herrschaft ohne Integration*. 2006. Frankfurt am Main.

- (54) Vergilius, *Aeneis*. 7. 641.
- (55) Vergilius, *Aeneis*. 8. 675-681.
- (56) Vergilius, *Aeneis*. 12. 821-828.
- (57) Strabon. 5. 1. 1.
- (58) Plinius, *Naturalis Historiae*. 3. 138.